

# 3サンハイツせけんばな紙

第 6 号 令和4年5月1日

編集責任者 田島康弘 (3-101)  
作成責任者 渡邊芳憲 (9-503)  
編集委員 小松清明 (10-501)



昭和41年改測の地形図に海岸線等付記

夜が明けると、谷山まで遮るものなく見ることができました。南小学校で炊き出しをしており、そこでいただいたおにぎりと漬け物の味がおなかにしみました。

### 郡元大火体験談

昭和36年当時、私は小学6年生でした。10月2日の未明に約800世帯を消失させた郡元大火は、火元が私の家の5軒先で、前日10月1日は日曜日で、南小学校の運動会があった日でした。私も家族も運動会の疲れもあり、ぐっすり寝ており、火事だとの声で飛び起きしましたが、その時はもう、家財道具を運び出すゆとりはありませんでした。急なことで、逃げるので精一杯でした。そのまま堤防まで逃げて、家が焼ける様子を見ていることしかできない状況でした。その夜は桜島の灰もひどく、言うなれば「踏んだり蹴ったり」の状況でしたが、とても、自分の様子を客観的に振り返る余裕などありませんでした。自分の家が焼けた後は、火が南西方向に燃え広がり、家が焼け落ちていく様子を綺麗だと眺めていました。今考えると感覚が麻痺してしまっていたんだとわかりますが、その時はただもう綺麗だとしか考えられませんでした。

## 昔語り

南孝治 (8204)

## 5月行事予定

- 7日 (土)
  - ◎鴨池小学校 PTA リサイクル活動
- 9日 (月)
  - ◎火災予防運動の日 (毎月9日)
- 14日 (土)
  - ◎鴨池小学校・中学校土曜授業
  - ◎合同リサイクル 7:30~8:00
  - 主催：鴨池小学校・校区コミュニティ協議会
  - 収集対象：廃食用油、古本、制服、キッチン金属、バルマーク、インク・カートリッジ・トナー
- 19日 (木)
  - ◎鴨池小学校春の一日遠足
- 29日 (日)
  - ◎プティエコール (女性学級)・ダレデーモマナヴェール (成人学級)
  - 合同開講式・第1回講座 10:00~12:00
  - テーマ：「出会いの場となるコミュニティ」
  - 講師：鹿児島大学教授 金子満先生
  - 場所：鴨池小学校体育館
  - 定員：50人
  - 申込：鴨池校区コミュニティ協議会事務局 ☎099-285-1522 (月水金 9:00~12:00、祝日休み)

## 団地内の野草

田島康弘 (3101)

フヨウカタバミ(芙蓉片喰、芙蓉酢漿草) 南アフリカ原産の多年草で、明治中頃に渡来。一つの花茎に1輪だけ五弁花を咲かせます。花弁は渦巻くように重なり合い、基部は黄色です。15号棟の東側歩道の生垣の下に一輪だけ咲いていました。どこにでもあるピンク色のムラサキカタバミと似ていますが、ムラサキカタバミは一つの花茎に多くの花を咲かせ、5枚の花弁にも隙間があります。野草らしくないかもしれませんが、今回はあえてこれにしました。



# 鴨池歴史散歩―郡元大火編

渡邊芳憲（91503）

今回は、1面の寄稿に関連して昭和36年10月2日未明に発生した「郡元大火」についてです。まず、当時、鹿児島市消防署次長だった久保一大さんの証言を紹介します。（出典…「写真と年表でつづるかごしま戦後50年」南日本新聞

## 郡元大火

写真は時に言葉よりも雄弁だ。下の写真は全焼七百五十一棟、半焼三棟、被災者七百七十四世帯三千六百六十一人の被害が出た昭和三十六年十月二日未明の鹿児島市の郡元大火を、夜が明けてから南日本新聞社機上より撮影した。

火元は、逆三角形に見える焼け跡の上辺のちょうど真ん中辺り、当時の風は写真上の鴨池空港から下へ向



久保 一大さん

かい風速七、八メートルだった。三隻の船も燃えた記録があるが、それはまだ白煙がくすぶる一帯なのだろう。

「私が現場に着いたのは午前一時四十五分、出火推定時刻の十五分後です。すぐに特命出動へ切り替え、谷山市の応援も得て消防車二十四台、三百三十二人が動員されました」

当時、鹿児島市消防署次席だった久保一大・元同市消防局長（六八）は、総員出動を命じた後、すぐに「退避」の命令を出す羽目

## 1分10棟ずつ炎上

現場に消火栓は八カ所。だがいずれも配管の末端にあたるため、風上の元栓から水を取り水圧が低下、十八メートル水圧はもの十分で尽きた。折あしく干潮で海からの取水もため。しかも、現場は一間道路の両側にバラックが立ち並び住宅密集地。出火から八十分後に火事は海岸へ達し、燃えるものがなくなり消えた。戦災を除き、戦後鹿児島市最大のこの火事は、一分間に十棟ずつ燃えた勘定になる。死者が一人も出なかったのが不思議なくらいだった。

「前年の一月に十五棟全焼し、死者三人が出た郡元火事の教訓でしょう。空き家から出火したこの郡元大火もそうですが、当時は電話が普及しておらず、発見は消防署の望楼でした。火事は第一報が重要なんで



一夜明けた郡元大火

社刊）証言下の写真も同書から。当時の地名は、新聞の記事によると、郡元町新川港となつていますが、現在の三和町です。範囲は10月2日付け南日本新聞夕刊写真の中の地図によると、亀乃湯付近から南側の殆どが焼失しました。仁風寮（現在の三和保育園）のある区画は被害がなく、大通りが自然の防火線となつた恰好です。参考に1面に地図を載せました。被災戸数は七百五十一世帯となつています。（被災戸数の数字を採用しました。）

なお、このとき、鹿児島空港（鴨池飛行場）はまだ、延長されておらず、本紙第3号に掲載した航空写真のうち、右側の写真の状態でした。消火作業は、強風と水不足、狭小道路・密集家屋に阻まれ、困難を極めたことが、証言からうかがえます。



また、戦後最大の火災となつたことから、県は出火当日の2日夕方には救助対策方針を決定し、仮設住宅の建設等のための建設材木の確保などに動き始めたことが3日付けの新聞に掲載されています。

この日の「南風録」には、火事場泥棒がいたことが書かれています。被災者が持ち出した品物を狙った行動や、運び出したタンスの抽斗をかき回している所を見られたりしています。また、野次馬にも苦言を呈しています。消防自動車の進行に難渋する場面もあったようです。

近年、世界的に我慢強さや取り乱さず、お互いを思いやり、ルールを守る日本人の姿が賞賛されていますが、この頃は日本人も、まだまだ、改めるべき問題行動を起こしていたようですね。